

## 地域の環境変化は庭木から

高津 佳史

ファナ地域では、新実践者による活動も始まり、地域苗畑の育成と苗木配布が継続的に行われるようになった。

では、配布された苗木はどのように使われているのだろうか。学校林や生垣としてまとまって使われる例もあるが、多くは自宅や近くの畑に単木で植えられている。ファナのような地方（郊外）では植栽スペースも広いが、市街地では住宅の中庭など場所も限定されてしまう。

首都バマコの住宅は、中庭を囲んで外壁に沿って居室が並ぶスタイルが多い。模式図に示すように、中庭には井戸やかまどと並ぶ重要な構成要素として、庭木の存在が示されている。「日本で最も有名なマリ人」と称されるウスビ サコ氏らの研究によれば、木に近い居室は家主や家長、賃貸の場合は古参の住人が利用することが分かった。木があることで生活の質が向上するからだと考えられる。庭木付きの部屋は、優良物件なのである。

庭木には、樹冠が日差しを遮り、樹下に空間が広がる緑陰樹が好まれている。現地ではエタージュと呼ばれる種類やインドセンダンなどである。反対に、アカシア類のように棘の多い木やユーカリ類のような縦に長い樹形は日陰を生まないため、好まれないと言う。

少数の苗木配布で地域の環境が変化するのか？という問いには、私が専門とする鳥類の生息状況変化から答えたい。

日本の都市部の鳥類相は、この30年で大きく変化したことが分かっている。例えば、シジュウカラという小鳥を例にとると、私が野鳥観察を始めた昭和40年代の大阪近郊や東京下町には樹林性のシジュウカラは生息していなかった。それが今ではごく普通種になっている。理由は主に街路樹の成長だと考えられている。思いがけず大木となった街路樹がシジュウカラの生息環境を創出した結果である。都市の景観対策として植えた木々が、樹林性の生物を呼び込んだのである。残念ながら、こうした環境変化を予測した研究者は一人もいなかった。

自ら苗木を育て、その苗木を庭木として植える。街路樹や学校林を増やす。その先には、地域の環境まで変化させるような変化がマリでも起こるはずである。



バマコの住宅の模式図

## 今年度の新実践者決定！！

今年の3月頃から、新実践者の候補者を選び、雨期開始前後に苗木を供与してその生育管理の状態を見てきました。そして12月に入った今、新実践者5名が決まりました。今回は新実践者を取り巻く背景も含めながら、新実践者にスポットを当ててご報告します。

### 新実践者を選ぶまで

これまで、地域の里山を再生するために、地域で高い技術を持つ地域苗畑主を講師として、里山再生に必要な技術を学び、自身の里山で自ら木を育てていく実践者を育ててきました。昨年からはさらにその輪を広げるために、実践者の周辺の村で関心のある篤農家たちに声をかけて、先輩実践者の経験や技術を共有してもらいながら、自ら苗を育てて木を育てていくことのできる「新実践者」として仲間に加わってもらおうとしています。

これまでの活動の中で見出してきた篤農家、マリ人スタッフや実践者からの推薦などから候補者を選びました。今年は希望者も多く、候補者が19名と非常に多くなりましたが、それほど木を育てることへの関心が高まっていると感じています。候補者たちは、雨期が始まる前後に、サヘルの森から供与された数十本のユーカリを、先輩実践者に助力してもらいながら、自身の里山に植えます。そしてその後の木の育ち具合や管理状況を見ていきます。



候補者の農園に供与した苗木を植える

### 新実践者選抜の基準

新実践者には、①供与した苗木の生育・管理状況、②木を育てる環境（柵や井戸、適当な土地などの有無）、③木を育てる意欲・根気などを基準として、今年度も5名を新実践者として迎えます。資金やスタッフの労力もあるので、5名と人数を決めて行っていますが、惜しくも選外となった候補者の中でも、きちんと植えた木を育てている候補者は、来年の候補者へ回し継続して関わっていく予定です。

12月には来年の育苗に向け、5人の新実践者の里山には、金網を1巻供与して、簡易苗畑を設置します。

### 関心の高さの背景

木を植えることに関心が高まっているのは、彼らの周辺で里山の木々がかなりのスピードで減少していることが原因です。家を作るにはもはや自然の木から材をとることはできないほど、中高木は消え、日常の薪炭材も遠くまで取りに行かなければならなくなりました。

昨年、新実践者として仲間に加わった、ジリマシギ村のマドゥ・クマレさんは、以前に自身で育苗した苗木を植え育った、4haのユーカリ林を持っています。先日、首都バマコの建設会社が大きなトラックで建設補助材として1,500本のユーカリ材を買い付けに来て、112万CFA（約25万円）を売り上げました。

建築補助材は、セメントブロックで作る建物の屋根が固まるまで下から支える支柱として使われます。1本の長さは3m30cmと決まっています、これはユーカリ1本の立木から1~2本の材が取れます。この材にならなかった枝木は家庭の燃料として自家消費されます。



クマレさん自身で育成した4haのユーカリ林

首都だけでなく、ファナ地域の多くの街では、日干しレンガではなく、セメントブロックの建物を建てるのが多く、この補助材のレンタル業を始める人もいるくらい需要があります。

こうした、生活上の不便、材の需要増加と成功例などから、これまで以上に木を植えることへの関心が高まっているのです。

### 里山再生への想い

では、こうした背景を私たちサヘル森はどう考えているのでしょうか？

農村に暮らす彼らが現金収入のために木を植えることを手放しで進めているわけではありません。木を植えることへの関心が高まること自体は良いことですし、苗木を自身で作る木を育てていく人を増やしていこうとしています。植えたユーカリは、都

市や町で消費される建築補助材だけでなく、日干しレンガの家の梁と屋根の下地材、トタン屋根を固定する下地材、日除け小屋の柱や屋根の骨材、ロバ車の轆（ながえ：車の前に長く伸びた2本の棒）、牛犁の軛（くびき：犁を引かせるときにウシの首に載せる木製の器具）など、これまで自然木の材に頼っていたものの多くはユーカリ材に置き換わっています。先の補助材の残り材を燃料に使用している例のように、将来的には植えたユーカリを薪に使うようになるかもしれません。



日除け小屋の建材もユーカリに置き換わりつつある

サヘル森が関わる実践者や地域を都市のための消費材の生産者や生産地として育てていくというよりも、彼らが育てた木を使うことで、今疲弊している灌木林への圧力が減り、里山が回復するようになれば良いと考えています。（榎本肇）



Cailcedrat

## 2023 年の現地活動

2 回のクーデター以降、マリは政治的にも社会的にも安定せず、フランスに続いて、各国の軍が国連平和維持軍から撤退を表明するなど、さらに混迷を深め、好転する兆しが見られません。このような状況から日本人スタッフの派遣も難しいと考えられ、マリ人スタッフ・現地協力者を中心に活動を進めていく形になると思われます。

### 里山再生実践

2023 年は、新実践者を育て始めて 3 年目です。これまで同様に来年度の新実践者を選抜します。初年度の新実践者はこれまで苗木を育苗し、2 年間木を植え育ててきました。今年は彼らの苗畑で、希望する同じ村の村人と共に苗木の作り方や雨期開始前後の植栽方法などのワークショップを開き、活動の輪を同じ村の村人に広めていきたいと思えます。もちろんその過程にはマリ人スタッフと先輩実践者にも協力してもらいます。

### カソマブグー試験地

2022 年は、トラオレたちマリ人スタッフの工夫もあり、直播した在来種チャンガラがたくさん芽吹きました。ユーカリ一辺倒でない、チャンガラやシアバターノキなどの在来種の育成方法の確立も継続していきます。

### 学校林育成

ラミニブグー小学校の学校林育成は、幹線道路沿いもあって多くの人々の目に留まり、自分たちの学校にもぜひ育成したいと、次々と要望が寄せられています。2023 年も 2~3 校で学校林の新規育成を行いたいと思えます。

## ウェレケラ小学校の学校林、コンクールで 1 位受賞！！

今年 6 月に、サヘルの森の支援を受けて学校林を育成したウェレケラ小学校が、ファナ地域の学校推進センター（CAP）が行う学校林育成コンクールで 1 位を受賞しました。ウェレケラ小学校は 10 年ほど前に JICA が学校運営委員会支援プロジェクトを行っていたり、ODA で新校舎を建設したりしていて、何かと日本と関わりのある小学校です。学校運営委員会の保護者たちは、来年も学校林を育成してまた 1 位を取りたいと意気込んでいるそうです。



コンクールのトロフィー



学校林を前にトロフィーを掲げる学校管理委員会の保護者たち



マリの村をめぐるっていると、村の真ん中に大きな木が残されていることがある。多くの枝を四方に張り出し、それぞれの枝からは気根が大地にまで伸び、しっかりと支えている。この木は、イチジク属の木で、日本では「絞め殺しの木」と呼ばれている類の木である。

イチジクをかなり小さくしたようなこの木の実には鳥に食べられ、他の木の枝に運ばれ、糞と共に種が排出され、枝上に着生する。枝上のわずかな水分と養分を頼りに、根はまず地面を目指して下降する。根が地面に着けば準備万端。一気に枝葉を伸ばして、今度は宿主となる木のさらに上の太陽を目指す。最終的には宿主の木を覆いつくすように、枝や根を張り巡らせ、最終的にはその木を枯らしてしまうのである。それゆえ、自身で自立できるように、多くの枝から気根を伸ばして自らを支えていくのである。

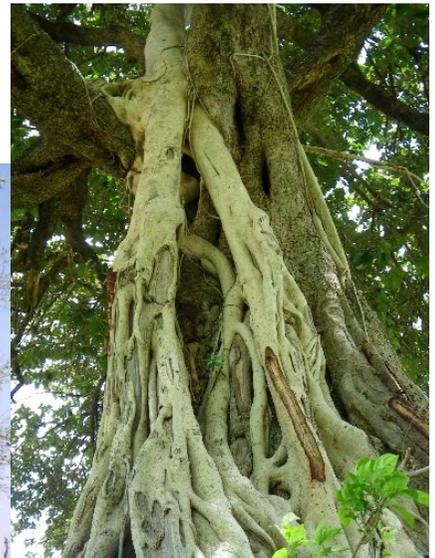


村の中央に残された木。枝から無数の気根が伸び、宿主亡き後の自身を支える。

村に残されているこの「絞め殺しの木」は、既に宿主が枯れてなくなり、その名残である空洞が残されているのがよくわかる。これらの木の多くは、村の憩いの場となり、日中村の老人たちが集まり、のんびりと会話を楽しんでいる。

この木がある近くの畑には、この「絞め殺しの木」に寄生されているシアバターノキなどの有用樹が多くみられる。これらの木が宿主を凌駕して枯らしてしまうまでには、まだ相当な年月がかかると思われる。

「絞め殺しの木」が多くの村で残されているのは、この植物らしからぬ生命力あふれた躍動感からなのかもしれない。(榎本肇)



手前の白い根が、着生して地面に伸びた気根(写真上)

## 【アフリカ関連書籍のご紹介】

### ニジェールのドクター・タニ 外科医 谷垣雄三物語

川本晴夫著 国際開発ジャーナル社刊 (2022年5月)

マリの隣国ニジェールで医師として活躍された谷垣雄三氏の足跡をまとめた書籍が刊行された。

私は、ニジェールに派遣されていた青年海外協力隊員時代に谷垣先生にお目にかかり、大変お世話になった。サヘル  
の森が発足する5年前、1982年から約35年  
の間、隣国ニジェールで医療活動に従事  
された谷垣先生。同じサヘル地域にお  
ける国際協力の先駆者として、この場をお  
借りして本書を紹介したい。



谷垣先生は、JICA専門家としてニジェールに派遣され、首都ニアメの国立病院で10年間外科医として活動された。筆者がお世話になったのもその頃の事である。

協力隊員はいつも屋台メシばかりだろうと、ご自宅や高級レストランで何度もご馳走を食べさせていただいた。

当時、ご自宅に何うと、エアコンの効いたリビングには運転手とお手伝いさんがくつろいでおり、ご夫婦は奥の部屋で小さくなっておられた姿が忘れられない。

その後、首都から東に700キロ以上も離れたテッサワにパイロットセンターを開設したが、ニジェール政府との対立、JICA専門家の任期終了、奥様の病没といったトラブルに見舞われる。しかし、自費で医療活動を継続されて、ご本人も現地で75歳の生涯を終えられた。



本書の中で特に興味をひかれたのが、若き日の先生について書かれた部分である。信州大学医学部に在籍中、学生運動に参加して「インターン制度撤廃」「医師国家試験ボイコット」運動に加わった結果、通算3回も国家試験をボイコットしたと記されていた。あの温厚な先生が、まさか「活動家」だったとは。現地政府やJICAとの厳しいやり取りも納得である。成田空港で偶然お目にかかったのが最後となった。いつの日か、テッサワまでお墓参りに行きたいと思っている。

(高津佳史)

## グローバルフェスタ(10/1~2)

10月1日(土)、2日(日)に東京国際フォーラム(東京都千代田区)で開催されたグローバルフェスタ JAPAN2022 に出展しました。昨年に引き続き、対面形式とオンライン形式を両立したハイブリッド形式での開催となり、主催者発表によれば、オンラインで約22000人、リアルでは12000人の来場者があったそうです。サヘルブースでも、来訪者が多いため、持参したリーフレットが閉会前に無くなるくらいでした。

今回は午前中から若い人たちの見学が多かった印象があります。「学校の先生から勧められて来た」とか、「将来国際協力の仕事をしたいので参考にしたいと来て来た」等、なかなか意欲的な若い人たちが多く来訪しました。ブースに足を運んでくれた学生さんの多くが、アフリカや植林について興味を持っていながら、コロナ禍で思うように活動できず、情報などを得るのにとても苦労しているようでした。環境の活動している方と突っ込んだ現場の話などができ、とても有意義でした。

今年は、大使館の出店もあったので、大使館の方も立ち寄ってくれました。9月30日にクーデタのあったブルキナファソの秘書官の方とも話しましたが、オフィシャルな情報がないからわからないと話していました(1月にクーデタがあったばかりですが、暫定政府に対してさらにクーデタが起きました)。

ブルキナとマリは隣国で、気候や文化など似ている部分もあるので、私たちの活動にも興味を持っていただきました。

ご協力いただいた関係者の皆さま、片付けまで手伝ってくれた会員の松永さん、ありがとうございました。(戸本喜文・榎本肇)

秋の一日、瀬谷のカフェに出店

## ぷらすマルシェ(11/5)

11月5日(土)、サヘルキャンプでなじみの横浜市瀬谷区で開かれた小さなマルシェに出店しました。会場は瀬谷駅からほど近い住宅街の中にある1軒家カフェ<1tas1 CAFE>ギャラリー。マリの民芸品やアフリカ布グッズ等の販売のほかパネルを掲示して活動を紹介しました。

11時から16時まで主なお客さんはカフェの常連さんや出店者のお知り合いでしたが、女性にはカラフルなアフリカプリントや泥染めにとても興味を持ってもらえました。大きなイベントと違ってお客さんとお喋りの花を咲かすことができ、店番の米倉さんと私も楽しい時間でした。会員で「バオバブの会」のマサンバさんも顔を出してくれました。「普段アフリカの話なんて聞く機会がないから良かった」という感想が聞けたのもうれしかったです。

実はこの出店は会員で地元に住んでいる原さんが自主的に機会を作ってくれたのですが、こういう取り組みが国内活動の新しい展開へつながることを期待します。(森律子)



グローバルフェスタのサヘルブース

## 国内活動(6月～11月)

### <定例活動>

会員交流や植物観察などを目的に、毎月第3土曜日に前代表の坂場さんと散策する「ぶらさかば」を行っています。

2022年は、新型コロナウイルスの感染再拡大や講師の都合などもあって、サヘルスタディーツアーも含め、残念ながら中止回が多くなってしまいました。

- ・6/18 庭園美術館、港区郷土歴史館  
\*講師都合により中止
- ・7/16 日野ふるさと歴史館と黒川清流公園  
\*新型コロナウイルス感染拡大の為に中止
- ・9/17 平林寺と歴史民俗資料館  
\*JR武蔵野線の新座駅を起点に台地を潤す野火止用水、武蔵野の雑木林が残る平林寺を経て、西武池袋線の清瀬駅まで散策しました。
- ・10/15 区立美術の森と中村かしわ公園  
\*講師都合により中止
- ・11/19 サヘルスタディーツアー「仙洞寺山」  
\*担当者の都合により中止

## サヘルの森会員総会のご案内

総会の日時が下記のように決まりました。

会場は、今年も利用した東京都内のJICA施設をお借りします。新型コロナウイルスの流行状況にもよりますが、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日時：2023年3月19日(日)

14:00～16:00

場所：JICA地球ひろば6階

セミナールーム601/602

住所：東京都新宿区市谷本村町10-5  
(JICA市ヶ谷ビル内)

最寄り駅：JR中央線・総武線「市ヶ谷駅」、  
東京メトロ・都営地下鉄「市ヶ谷駅」

今年と同様、会場参加とオンラインのハイブリッド開催を予定しています。詳細は、3月発行の総会資料に掲載しますので、ご確認下さい。

## クリスマス募金のお願い

コロナ禍の終息と平穏な日常の再開を願って、クリスマス募金へのご協力をお願いします。ウクライナ紛争に気候変動問題。今年ほど、平和や国際協調を願った年はありませんでした。マリの人たちともこの思いを共有できるように、微力ですが活動を続けて行きたいと思います。

今年は3年ぶりに日本人スタッフを派遣することができました。実践者と新実践者の活動状況、学校林の成長具合など、里山再生の現状をお伝えしたいと思います。

募金には、同封の振込用紙をご利用下さい。

## 振込用紙ご記入時のお願い

会費やご寄付でお振込み頂く際、振込用紙に領収書の要・不要を必ずご記入ください。尚、サヘルの森は寄付等による所得控除の対象になりません。

ご協力のほど、よろしくお願い致します。

## 会費納入にご協力ください

NPO法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000円
- ・維持会員 年 20,000円

特定非営利活動法人 サヘルの森

住所：〒194-0013

東京都町田市原町田1-2-3-403

TEL：042-721-1601 (留守電対応)

郵便振替口座：00170-6-115054

HP：<http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>

BLOG：<http://sahelnomor.exblog.jp/>

E-mail：[sahel-no-mori@jca.apc.org](mailto:sahel-no-mori@jca.apc.org)

\*\*\*\*\*  
機関誌『サヘル』No.111 2022年12月19日発行  
発行人/編集：高津佳史

\*\*\*\*\*